関西大学図書館所蔵・鍋井克之作品及び資料について

中島小巻

はじめに

鍋井克之（一八八八－一九六九）は、大阪出身の洋画家で、鮮麗な色彩と粘っこい筆触のある油彩画作品に定評がある。一九一五年、卒業制作（東京美術学校西洋画科）を第二回二科会に出品して以来、第三〇回までほぼ毎回作品を出品した。その画題の多くは、風景画でなかでも海辺を描いた作品が数多く目立つ。実際、鍋井は和歌山や箱根をはじめとして、頻繁に写生旅行に出かけている。一九四六年の二科会脱退後も二紀会を創設し、自身が「とかく旅行が多い」と供述するように、外へ赴きあらゆる風景を描き留めた。

また、洒脱な文体で、紀行文や自身の絵画感などを記した随筆集を執筆した。油彩画の入門書を残し、後進の育成に取り組んだことも特筆すべきであろう。加えて、鍋井の関心は絵画に留まらず、歌舞伎などの芸能にまで及び、歌舞伎に関する評論を専門誌に寄稿するほどであった。これらの文章からは、一貫した鍋井の芸術感を窺い知ることができ、鍋井研究にはなくてはならない資料である。

本報告で紹介する鍋井作品・資料は、関西大学図書館が大阪の美術資料をコレクションするなかで収集された一部である。これらの鍋井作品・資料群は、油彩画作品に比べると資料価値の低いものではあるが、鍋井の画業や人となりを知る上では興味深く、重要な資料といえる。

一　画業

- 一八八八年（0歳）：大阪市西区北堀江繁栄橋北詰に生まれる。父は旧土佐藩士で、家畜生命保険会社を経営していた。
- 一九〇三年（15歳）：大阪府立天王寺中学校に入学。後輩に宇野浩二（一八九一－一九六一）がいた。鈴木松年（一八四八－一九一八）の弟子松波長年に入門、日本画を習う。
- 一九〇五年（17歳）：広瀬勝平（一八七七－一九二〇）に師事、洋画家を志す。
- 一九〇八年（20歳）：東京美術学校の受験に失敗、白馬会原町洋画研究所で長原孝太郎（一八六四－一九三〇）にデッサンを学ぶ。
- 一九〇九年（21歳）：四月、東京美術学校西洋画科予備科に入学、九月、本科に進み、小出楢重（一八八七－一九三一）と同級になる。
- 一九一五年（27歳）：三月、東京美術学校西洋画科卒業。九月、第二回二科展に《秋の連山》（卒業制作）他二点が入選、宇野の勧めで『改造』や『中央公論』などに小説を発表する。
- 一九二二年（34歳）：四月、渡欧、パリを経て、ヴェトイユに滞在、制作を行う。一二月、イタリアを旅行する。
- 一九二四年（36歳）：黒田重太郎（一八八七－一九七〇）、国枝金三（一八八六－一九四三）、小出らと信濃橋洋画研究所を開設する。
- 一九三〇年（42歳）：大阪府豊能郡北轟木村に新築、転居する。

・一九三八年（50歳）：大阪阪急で色紙展を開催する。
・一九三九年（51歳）：満州と中国に写生旅行に行く。
・一九四三年（55歳）：奈良に疎開、慈眼寺に部屋を借りる。
・一九四四年（56歳）：中之島洋画研究所（信濃橋洋画研究所）を解散する。
・一九四六年（58歳）：二科会を脱退し、二紀会の創立委員となる。
・一九五一年（63歳）：小磯良平（一九〇三－一九八八）、古家新（一八九七－一九七七）、竹中郁（一九〇四－一九八二）らと風流座を結成、市川寿海の指導によって、大阪三越にて第一回公演を行う。（三三年まで六回公演）
・一九五二年（64歳）：大阪府の後援により、奈良で陶器絵付の研究を行う。
・一九五五年（66歳）：三月、東京中央公論画廊で水墨と陶画展を開催する。六月、大阪高島屋で水墨画の個展を開催する。
・一九五七年（68歳）：大阪高島屋で水墨画の個展を開催する。
・一九五九年（70歳）：大阪とりゐや画廊で水墨画の個展を開催する。
・一九六三年（75歳）：三月、三代実川延若襲名に際して、舞台装置をなし、二代延若楼門の五右衛門図緞れ織を寄贈する。一一月、東京三越で水墨画の個展を開催する。
・一九六九年（81歳）：腸閉塞のため大阪中央病院で死去する。

二　作品

1．自画像　軸装箱入　本紙三三・三×二一・六㎝　墨画
賛「愛狐園主人間中至楽之図」、署名「湖山人」、落款／箱書
蓋表：「自画像　鍋井克之画」、蓋裏：署名「□一」、落款

本作品【図一】は墨画による鍋井の自画像である。鍋井の油彩画作品は、重厚な絵具のマティエールとねっとりとした筆触、鮮烈な色彩が大阪的な油彩画として高い評価を受けている。一方で、六〇代後半から（「一　画業」波線部を参照）水墨画の個展が目立つように、本作に見られる墨画作品も数々残している。そもそも鍋井の画業は、日本画に出発しており、随筆集においても「水墨雑感」「津田青楓の日本画」「富岡鉄斎」（『富貴の人』一九四〇年）、「日支融和工作（絵画から見て）」「日本画と洋画の技法」（『絵心』一九四三年）といった項を立て、独自の日本画論を展開している。鍋井の日本画への深い造詣を窺い知ることができる。

しばしば鍋井は、日本画作品の署名に「湖山人」の号を用いた。鍋井は、「湖山人」の号に関して、美術評論家佐波甫との対談の際、「湖山人は愛狐園の略号狐山人の意[1]」と口述している。「愛狐園」とは、一九三〇年大阪府豊能郡北轟木村（現在、池田市住吉一丁目一二の四）に構えた住居を指す。賛から本作品も愛狐園で描かれたものであることがわかる。一九四七年に発行された『寧楽雅帖』には、本作と類似する画賛が挿絵として掲載されている。【図二】

本図に描かれた鍋井は、着物を装い、何かを考え込んでいる。墨を磨り、びわを描こうとする姿が見てとれる。その姿や巻子の積まれた机から、文人のようにも見てとれ、鍋井が洋画家であることを忘れてしまう。

【図一】《鍋井克之自画像》

【図二】《愛狐園主人自像》（一九四七年頃）

実際、当時鍋井と交流のあった小説家広津和郎は、鍋井の様子を次のように回想している。「縞の着物に角帯をしめ、頭にちょこんと鳥打帽をのせた鍋井君のいでたちは、凡そ洋画家らしいものを感じさせなかった。[2]」と。また広津は、鍋井から池大雅（一七二三－一七七六）の作品の写真を見せられたエピソードについてふれ、一連の作品から鍋井が「ひそかに大雅堂を目指していた」のではないか、と思いをつづっている。

鍋井の作品制作においても、文人画（南画）家的な思考を窺い知ることができる。鍋井は、自然（風景画）を描く際の理念として、次のような言葉を残した。

> その人の画になって自然が見えなくてはいけない。僕も自然の通りに描いているのではないが、画風がああだから、あたりまえに見られるのかもしれない。しかし実は自然は参考で、自分の頭にたよって描いています。これが私の写実なんです。[3]

鍋井が、自然を題材として見たままに写生するのではなく、精神に映える自然を絵画化し、鑑賞者に独自の自然感を感得させる絵画を目指していることがわかる。「写実より写意」という文人画（南画）の創作理念に通じる芸術感といえるではないであろうか。梅原龍三郎（一八八八－一九八六）や安井曾太郎（一八八八－一九五五）といった当時の日本洋画家らと同様に、鍋井においても、フォーヴィスムなどの西洋の前衛的な絵画表現に目を向けながら、文人画（南画）といった東洋の伝統的な理論、絵画表現にも強い関心を抱いていた。

2. 自筆絵馬　絵馬　一八・五×二三・五㎝　彩色画
表：賛「山海珍味」、署名「克」、落款／裏：署名「鍋井克之」、落款

3. 彩色画色紙　色紙　二七×二六㎝　墨画彩色
表：橙・ざくろ画、署名「克」、落款／裏：署名「鍋井克之」、落款

三　資料

1．挿絵

①『番傘』表紙画稿　『番傘』第二九巻第一一号表紙（一九三六年一一月一日）：二七・五×一八㎝（一枚）＊❶／掲載号不明：二七・五×一八㎝（一枚）、一七×一三・五㎝・一三・五×一七㎝（張り合わせ一枚）＊❷

＊❶

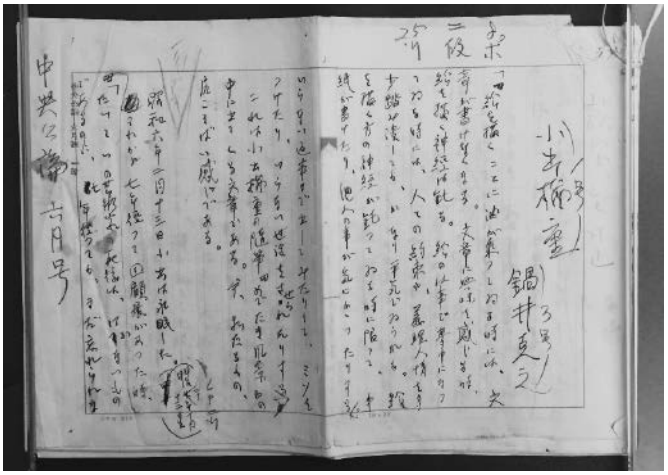
＊❷

2．自筆原稿

①「歌舞伎をなつかしむ雑談」二五・五×三六㎝　五枚　ペン書

②「寿海の人格的芸風」二五・五×三五㎝　五枚　ペン書

③「小出楢重――本朝洋画家伝－五――」『中央公論』第六八巻六月号、二七四－二八四頁、一九五三年　コクヨ四〇〇字詰原稿用紙　二二×三一・五㎝　三一枚　ペン書



「小出楢重――本朝洋画家伝 - 五――」原稿用紙

3．書簡

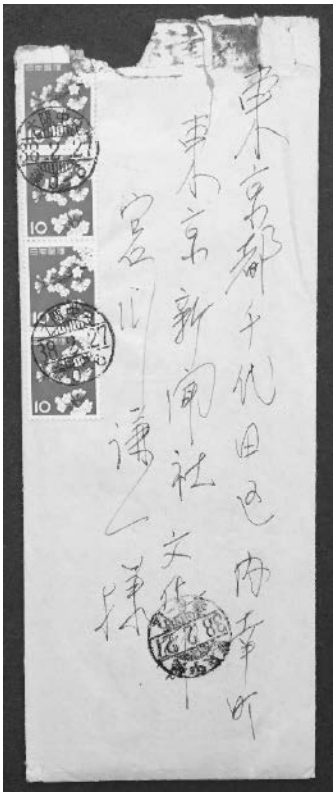
①一九五二年?六月二八日消印　沖田一宛　葉書　ペン書
②一九六一年一一月（日付不明）付　小林曽進宛　葉書　ペン書
③一九六三年二月二七日付　宮謙一宛　三枚　封筒付　ペン書＊❸

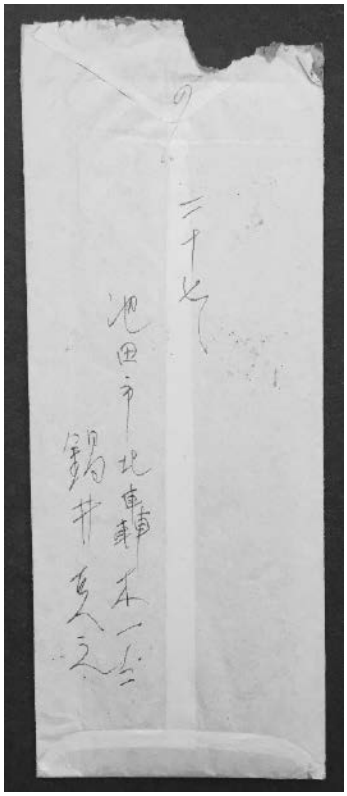
鍋井は、歌舞伎の専門誌『悲劇喜劇』や『幕間』に劇評を寄せるなど、歌舞伎を非常に嗜んだ人物であった。鍋井の画業と歌舞伎に関する特筆すべき事項としては、一九六三年三月、三代実川延若襲名に際して、二代延若楼門の五右衛門図の綴れ織を歌舞伎座に寄贈し、歌舞伎史に残る名演を称えたことであろう。綴れ織とは、タペストリーのことを指し、緞帳と同じ川島織物で制作されたものである。もちろん、現在でも歌舞伎座（一階正面玄関）に現存している。

③美術史家宮川謙一に宛てた書簡からも窺い知ることができるように、鍋井は本綴れ織制作にあたって、五〇号の油彩画の原画を仕上げた。書簡には、その原画が様々な方面から所望されていたことが記されている。しかし鍋井自身、「大阪にも博物館がありますが、やはり演劇、とくにカブキは東京がよいように思いますので…」と記し、早稲田大学演劇博物館への寄贈を望んでいた。その段階では、演劇博物館から本原画を所蔵したいという要望がとくになかったため、宮川に演劇博物館との間を取り持つよう依頼する書面であった。本原画は、宮川の努力の甲斐があってか、早稲田大学演劇博物館に所蔵された。歌舞伎の普及を重んじていた鍋井の姿が見える。

加えて、書簡の追伸欄には、「原画は織物より、顔などはよく出来ております。織物のむつかしさを初めて理解いたしました。」と記し、文章を括っている。

＊❸





注

① 佐波甫「鍋井克之氏と語る」『教育美術』第一一巻八月号、教育美術振興会、一九五〇年、三五頁。

② 広津和郎「七十路の半ばを越えて尚可能性」『鍋井克之』美術出版社、一九六六年。

③ 前掲書①佐波甫「鍋井克之氏と語る」三六頁。